浪人屋と私
―もう一つの家―
最終レポート

Ｉグループ　祁雨晨　１８１３１７１

１．紹介文

浪人屋というのは中国上海東華大学で勉強していた時、四人でルームシェアした寝室のことである。全く知らなかった四人の人生がその小さい部屋で出会った。なぜ浪人屋と呼ぶと言えば、自分でもよくわからない。ただその時、同じ日本語学科の私たちは「浪人屋」という呼び方が格好良いと思っており、その名前を決めた。

私は大学に入った前ずっと自宅で住んでいて、ルームシェアの経験でも上海の学校で通う経験でもなかった。最初は自分が大学生活を慣れられるかなと心配し、どきどきしていた。しかし、ルームメートの三人ともすごくやさしくて、親切な人だった。四人で一緒に外食したり、授業を受けたり、厳しかった先生に不満を言いながら宿題を書いたり、教科書を暗記したりした。その心配が飛ぶように早く消えてしまって、生活がとても楽しくなった。大学に入ったばかり、まだ子供っぽかった私たちが偶にきつい状況に陥ったりしてしまったが、「浪人屋」の仲間たちがいつも助けに来てくれた。皆が一緒に笑ったり、泣いたり、急速一年半を過ごして、私とルームメートの労さんは秋田に参った。

人と出会えることは必ず縁がある。私はそうしんじている。今年の九月、「浪人屋」の一員の曹さんも秋田大学に交換留学に来た。それでまた、「浪人屋」が異国で再開されてししまった。お互いに縁が深い私たちは、また秋田で楽しい人生を経営していく。

２．取材散歩に行ってみて

一回目の散歩は私が住んでいる留学生会館へいった。みなさんが家の家にきてくれて、その前一生懸命掃除した。その日大雨のせいで、佐野君と世奈さんと私がタクシーで留学生会館へ行った。そして皆さんがお茶を飲んだりアニメ（銀魂）を見たりして、私に中国の寝室はどのような様子という話について色々聞いてくれた。世奈さんは私がアニメ大好きのことを知り、結界師という作品を紹介してもらった。唯一の残念はアリフ君が病気で、来られなかった。このように日本の方と一緒にアニメを見ることなど、それまでは始めてだ。

二回目の散歩はまず、佐野君のアメフトの訓練場へ行って、そこで写真を撮った。そしてはま寿司を食べに行った。寿司を食べていたうちに色々の食べ物について話し合ったら、私は日本のムスリムの方たちが自由に魚を食べられることを知った。ほかの面白い話もいろいろある。

３．話し合い相手について

前に申し上げた通り、浪人屋の三人は今、秋田で再会した。しかし私たちにとって唯一

の残念は、また一人が国内に残っており、会えないことである。そのもう一人のメンバーは名前が李潤楚と言い、一年ほどぶり、大事な仲間である。李は１９９３年生で、ほかのメンバーたちより少し年下だけど、一番努力家であった。寝室で勉強するための時間をたくさんかけるし、予習復習などの仕事を必ず毎回でちゃんとしたそうであった。且つ李はとても心地良い人で、いつも喜んで人を助ける。
しかし、優等生以外の李が全く、二次元少女である。アニメを見たり、マンガを読んだり、ゲームを遊んだりした生活を楽しむそうであった。上海で行われた ACG エベントもたくさん参加し、時々イベントでコスプレイしていたそうであった。私も李に誘われて、そういう活動を何回参加してきて、とても楽しく、大変いい思い出を作った。
寝室で一生懸命教科書の本文を暗記したり、宿題を書いたりした李をみたら、自分もさらに頑張らないといかないと考えられる。それで一緒に共通好みの ACG を交流するのも楽しかった。私、何故李潤楚を話し合い相手として選ぶのかというと、やはり会いたかったからのであろう。

４．話し合い結果

先日話し合い相手の李潤楚と久しぶりにネットを利用し会った。

潤楚はこの間、早稲田大学へ交換留学の件で忙しくて、やっと手続きを終わって話し合いができた。

お久しぶりのチャットだが、二人の談話に不自然などちっともなくて、むしろさらに親しく感じられた。私たちは一緒に浪人屋で過ごした日々を思い出し、細かい思い出も様々話した。そして二人とも「浪人屋というコミュニティは我がもう一つのかわいい家」という同感を持っている。潤楚は「浪人屋では雰囲気が大変楽しく、皆が建前を捨てられて本音を言える」という話を言った。「例え節操あまりない話題でも楽しく討論できる」潤楚さんがニコニコしながらこう言った。

潤楚さんは二年生の時、体調があまり良く、常に病気になっていた。ある日、潤楚は熱が出て、先生から休みをもらって寝室に眠った。目を覚めたら、ベッドの傍に紙一枚を張ってある。「起きるとお粥とかを食べてね。後水もいっぱい飲みなさい。」という話をかいである。そのとき潤楚は「私はもう一つの家にいるんだ」と実感された。

私の場合は、上海で浪人屋の皆さんと一緒に楽しく付き合ったとき、近すぎるとその絆の大切さを逆にあまり感じられなかった。しかし日本にきたら、浪人屋の皆さんと別れて、また再会してから、その絆を深く感じられている。

そして浪人屋で何をしていきたいかについて、潤楚と私は同じ願いを持ちようになった。それは浪人屋全員の再会ということ、再会してから一緒に過ごせる一年間を大切にすることだ。また、たとえ皆さんが卒業し、違う町、違う国へ行ってもよく連絡することだ。そうしたい理由は特になく、ただその大切な友情を守っていきたいんだ。

５．浪人屋と私

私は幼いからコミュニティという概念にあまり実感していなかった。はじめて「私はそのコミュニティにいるんだ」と実感させたのは浪人屋だった。本物の家族ではなくても家族のようにお互いに気を配っている。もし労さん、曹さん、李さんではなく、ほかの誰が浪人屋いれば、浪人屋も存在していないでしょう。もし私ではなく、ほかの誰がその三人で出会ったら、多分浪人屋も存在していないでしょう。時々私はそう思っている。

来年の二月に帰国するので、その時また浪人屋に帰っても、私と労さん二人しかいない。また寂しくなるかもしれないが、頑張らないといかない。李さんと曹さんが戻ってから、また一年が残る。その大学生活に最後の一年は卒業論文や将来進路ための準備などしないといかなく、いろいろ仕事があり、大変かもしれないが、皆は励まし合いながら頑張るしかできない。これから私は浪人屋にいた楽しい思い出をちゃんと保存し、自分の目標の大学院を向いて歩み続く。

６．「コミュニティ」「コミュニケーション」とは何か

私の考えから、「コミュニティ」とは其々の人間がある統一の目標のため、自発、あるいは強制的に集まれ、作られた集団、組織だと思う。単なるの一人だけは「コミュニティ」が組み立てられない。同様に、「コミュニティ」の一単位としての個人の役割はどのようにきわめて小さくても「コミュニティ」の運転に影響を与えている。私は「浪人屋」というコミュニティで楽しく生活していたが、決してこの世にすべてのコミュニティは楽しい空気があふれるわけではない。決してすべてのメンバーが自分の所属しているコミュニティが好きわけではない。しかし、すべてのコミュニティの存在は必ず意味があると思う。好きでも嫌いでも、もしそのコミュニティの存在価値を認めるなら、努力を与えるもの。また、もし心からそのコミュニティが好きで、またそのコミュニティは自分にとって大切さがあれば、そのコミュニティのため努力するだけではなく、そのコミュニティと出会えてとても幸運だと思うはずである。

７．クラスについての感想

前期で同じクラスも参加したけど、違う内容でした。もし前期は個人と個人の結びを中心し、点と点が線になれば、後期の授業では個人とコミュニティの関係を考え、線を揃って面になる。したがって、前期の授業と比べたら難易度が上がたと思う。個人と組織の関係を了解したければ、まず相手その人も知らないといかない。しかし、相手の所属しているコミュニティを中心とする討論を展開した前に、相手本人についての了解は少し足りなかった。もし前期の個人と個人の交流を基づいて、また個人の背中のコミュニティを交流すれば、さらに深く進めるかもしれない。でも条件の限りがあると知っているから、さらに実行できるのは個人と個人の交流もできるだけ含めばさらによくないでしょうか。